

沖縄国際大学 沖縄法政研究所

第13回講演会

2007年7月11日（水）午後2時40分より、沖縄国際大学図書館4階AVホールにおいて、約30年間にわたり沖縄県の観光業界をリードしてきた花崎為継氏（北中城文化協会会長、元南都ワールド社長）を講師に招き、沖縄法政研究所第13回講演会を開催した。当日は、学生・市民約100名の参加があった。

「みずからを直視する」とはどういうことか ～君たちに期待する～

花 崎 為 継
（北中城村文化協会会長）

○司会（大山）

きょうは沖縄国際大学沖縄法政研究所の第13回講演会、講師に花崎為継さんをお迎えいたしまして、「みずからを直視する」とはどういうことか～君たちに期待する～というタイトルで御講演をお願いしています。花崎為継さんの肩書きは北中城村の文化協会会長です。もう一つは北中城村の村議、それから皆さん御存じのとおり玉泉洞の南都ワールドという会社の元社長という肩書きを有していらっしゃいます。その肩書きを見ますと、沖縄の経済、文化、政治の第一線ですべてにかかわっている方で興味深いお話が聞けるのではないかなと期待をしています。

○稲福所長

皆さん、こんにちは。法政研所長の稲福です。本日は暑い中、本研究所第13回講演会に御参加くださり、ありがとうございます。私のほうから講師の略歴を御紹介します。

花崎為継さんは1943年北中城村のお生まれです。1歳のころ家族で熊本に疎開され、20年近くそこで過ごしております。国学院大学に進学、1970年に卒業し、沖縄

に戻られて玉泉洞に就職。1991年から2003年まで10年余りにわたって、玉泉洞の琉球王国村南都ワールドの社長として、県の観光産業を引っ張ってこられました。民間企業の第一線を退かれて後は、北中城村の文化協会会長、さらに昨年9月から村議として郷里のために汗を流しております。そのような人物です。私は節目、節目に花崎さんを訪ねて、そのさりげない会話の中に人生の指針を探っております。そして、私が悩んでいたことなど、こんなちっぽけなものなのかと勇気づけられることがしばしばあります。常日頃、彼の警咳に接している者の一人として、ぜひ若者たちの前で話をしてほしいと申し入れたところ快く引き受けてくださり、きょうの講演会が実現しました。案内文にもありますように、悩み苦しむ君たち若者がきょうの話の中から何かを捉んで、一步を踏み出し、勇気を持って自分自身に、そして社会に向き合うことを願っております。

以上、簡単な講師紹介と所長のあいさつを終わりたいと思います。

○花崎

大変御丁寧な紹介をいただき、まことにありがとうございます。私のことじゃないような、すばらしい御紹介に恐縮しています。それにしても私ごとき者がこの大学という最高学府の場で講演などやっていいものかという不安でいっぱいでありませぬ。ここには私の友人たちも何名か来ておりまして、日ごろ私が大口をたたいているので、こいつは今日何をしゃべるのかという気持ちで多分聞いていると思います。大変なプレッシャーを感じていますがけれども、私なりに一生懸命お話をさせていただきたいと思いますので、よろしくお願ひします。

この題名につきましても、大そうな演題でございますけれども、私はいわゆる論理的な人間ではありませんので、系統だったお話は出来ません。私の体験、見聞による話になりますのでどうか一般教養の一部ということでお聞きいただきたいと思います。

それでは、本題に入りますけれども、皆さんは主に法学部の2年生、1年生ということをお伺いいたしました。今、大変懐かしく思っておりますのは、私も40年前は法学部の学生でありました。そして鮮明に思い出しますのは、法学部の授業で沢登先生という先生がいらして、その先生の刑法の授業の事でありませぬ。皆さんは2年生、1年生ですから、まだ専門課程に入っておられないでしょうけれども、専門

課程に入ったら刑法を習うと思うんですが、刑法の基本的な考え方に主観主義、客観主義というのがある。という話ですとか、未必の故意という話をお伺いしました。どんな話だったかと言いますと、非常に寒い夜に友達の部屋をのぞいたら彼がお酒を飲んで泥酔をしている。しかも窓を開けばなしで寝てる。このままだったら風邪をひくと思って窓を閉めて帰った。そしたら、ガスが充満して翌日、その人が死んじゃったという話ですとか、逆にあまり快く思っていない人の部屋をのぞいたらこの人も泥酔して寝ている。そこで、外は凍りつくような夜ですから窓を開けて帰れば、この人は凍え死ぬかもしれないと思って窓を開けて帰った。そしたらガスが充満して殺そうと思ったのに助けてしまった。先ほどは助けようと思ったのに死んじゃった。こういう話を沢登先生が非常にさわやかにしゃべっておられていたのを鮮明に思い出すわけです。私は聞きながら、学問の真髄に触れたような気持ちになりました。皆さんも3年生になられたら、こういう講義が聞かれる。学問の真髄に触れることができる、大いに期待されて結構だと思います。こういうぐあいに、40年前のことを鮮明に覚えているんですから、皆さんひよっとしたら、こいつは相当優秀な学生ではなかったかと思われるかもしれませんが、現実は全くその逆、180度逆でありまして、まことに悲しい学生時代でありました。どのくらい悲しい、辛いかと言いますと、普通、大学を卒業する年齢というのは遅い人で25歳ぐらいには卒業されると思うんですが、私が卒業したのは27歳だったんですね。27歳で卒業するということはどういうことになるかと言いますかと、就職試験を受けようとしても、年齢制限に引っかかってなかなか受験ができない。今はわかりませんが、あの当時は25歳までで年齢制限に引っかかる。しかし仮に受験していたとしてもおそらくペーパーテストで落ちていただろうと思います。ということで、結局は先ほど御紹介がありました玉泉洞というのは、試験はありましたけれども、面接試験だけで済んだんですよ。27歳で卒業するということは、普通のテストは受けられない。面接試験のところぐらいしか、あるいは年齢制限のないところしか就職はできないということがありまして、しかし、まあ結果としては、私はそれでよかったのかなという気がしております。社長までなったわけでありまして、まあ頑張ったわけですよ。法学部を卒業して就職したあの頃、玉泉洞という会社はまさに作りたてのほやほやの会社でした。大学出は何名かいましたけれども、たまたま法学部出身

は私1人しかいなかったんですよ。そこで総務担当の取締役が私を呼んで就業規則をつくってくれと言うわけです。ところが法学部出身の私が就業規則という言葉も初めて聞くような、そのぐらいだめな学生だったわけです。それにしても、その上司が偉かったと思うのは、いつまでにつくってくれと言わなかったんですね、私ができないのをわかっていたと思う。結果はつくったんですけども、今振り返って大学というものがすばらしいところだなと思うのは、そんなにできの悪い学生でもどうやればこの問題が解けるだろうという、例えば就業規則にしても、どうやればこれがつくれるだろうかという、そういう頭が回ったんです。おそらくそれは大学というところで受けた教育のせいだろうと今でも思っています。先ほど一般教養と申し上げたんですが、観光業界に身を置いたわけですから、沖縄の観光について少しお話ししたいと思います。観光産業というのは通常はまさに平和産業と言われているんですけども、沖縄の観光に限っては誠に因果なことに太平洋戦争が沖縄観光の引き金であった。というのは沖縄観光は、戦争で亡くなった方々の慰霊の観光から始まったんですね。復帰前の年、1971年は20万人しか沖縄に来ていなかった。それもほとんど参拝客でした。これが復帰した途端に約倍、40万人という数字になった。おそらく人間も、物事も一緒だと思うのは、成長過程に節目、けじめというのがあった方がいい。沖縄観光はまさにそういうのがありました。戦争があつて20万人の人が亡くなって、20万人の観光、参拝者が来て、それから復帰という非常に沖縄の歴史にとって大きな出来事がありました。その当時日本本土はどういうことがあったかと言いますと、南国ブームというのがありまして、本土で南国というと宮崎のことを指していました。しかし、本物の南国が沖縄が本土復帰した事で、日本に誕生したわけです。沖縄から宮崎を見れば北国ですからね。次に、何があったかと言いますと、海洋博がありました。海洋博というのは、まさに沖縄の青い海、青い空というものを強烈に印象付けた。さらに決定づけたのは首里城の復元、沖縄の文化を象徴する建物でした。こういうものが全部総合してあるのが今日でありまして、500万人をこえるまでになったわけですが、それが最近の県発表では1,000万人を目指すというところまで成長しているわけです。

そこで皆さん卒業したらどうしようかというようなことをお考えと思いますが、年齢制限があるのは普通はみんな大きい会社、公務員ということなんですよ。おそ

らく皆さんの中にはそういう安定志向といいますか、公務員に目を向けておられる、大きな会社に目を向けておられる方はたくさんいらっしゃると思いますが、全員がなれるわけではありませんので、私はなれなかったんだけど、あるいは公務員になっておれば、ほんとに一つの歯車といいますかね、今みたいな仕事はできなかつたと思います。自分が育った業界でありますけれども、観光業界というのはこれから大きな魅力のある職場になると思います。ただ一つ、今問題と思うのはマスコミでもよく出ますが、ゲーミング構想という話です。ゲーミングというのは言葉は柔らかいんですが、中味はバクチですからね。これをどうも県知事を始め、流れとしては沖縄に取り入れようじゃないかという方向にあるような気がいたします。これはぜひ若い皆さんにも考えていただいて、きょうはマスコミの方も来ておられるみたいですが、やはりある種の世論を起こして、ほんとにゲーミングがこの沖縄に必要なのかを論じる必要があると思います。私は、沖縄にゲーミングは必要ないと思います。今世界のリゾート地、ハワイにもない。世界で自然を活かしているところにそういうものはないんです。沖縄の那覇を中心にして千キロメートル、東京を中心にした千キロメートルの人口を比較しますと、我々の沖縄を中心にした方が多いんです。今、中国があれば経済成長をしていますし、それから韓国もありますし、まずこの地域で沖縄ほど素晴らしい自然環境のところはない。そういうところにゲーミングなんていない。皆さんの若い力をぜひおかりして、皆さんの発言をいただいて考えるべきだろうと思います。

観光業界にもう一つ申し上げるならば今申し上げたように間違いなく1,000万人というのは、近々超えます。皆さんが働く魅力ある職場になるだろうというのは、実は今沖縄の観光業界には、はっきり申し上げて人材が非常に少ない。だから社長までなれたんですが、人材があればなれなかつた。今でも人材というのは少ない、というのはこれから間違いなく伸びるのは中国からの観光客、それから韓国の人たち、こういう人たちを満足に御案内できる人間が沖縄には非常に少ないんです。もし、あなた方は今20歳前後ですよ、あなた方が大学で身につける教養にプラスして、これから2年間学校にいる間に英語をマスターする、それから中国に行って3年間中国語を勉強してくる。それからあと3年韓国に行って、韓国語を勉強してくる。それでもあなた方はまだ20代です。韓国の文化、中国の文化と琉球の文化を比

較しながら説明する人は沖縄にいない。1,000万人という見込みの中には、間違いなく中国、韓国の人たちを大幅に見込んだ数字であります。あなた方は今私が言った3カ国語、それに日本語ですから、4カ国語を自由に操り、そして今言ったような説明もすれば、沖縄にとって大きな人材になります。

ちなみに「観光」という言葉は物見の遊びの言葉に聞こえますが、語源は中国紀元前の『易経』という本の中にどう書いてあるかと言ったら、「観光とはその国の光を觀せる、ということはその国の王様にとって非常に有益なことである」、そういった文章があるそうです。つまり観光というのは、決して物見ではなくて、我が琉球の非常にすばらしいものを見せるというか、説明する。そういうものであります。ですから、皆さんにとってもいわゆる公務員ばかりじゃなくて、こういう民間にも非常に魅力的な仕事がありますよと言いたいんです。しかもその場所はある意味では空白状態なぐらい人材がいない。ぜひ皆さんもその辺に照準を当てたお考えをしてみたいかがででしょうか。いわゆる官だけではないほかの魅力的なものを見つけれたらいかがででしょうか。以上が大体沖縄観光の大まかな流れと現状であります。

先ほど少し申し上げましたが、私の青春時代というんですか、むちゃくちゃな青春時代でありました。ポスターにも少しありましたが、近ごろの若者はどうだという話で、あなた方も若者として御批判を浴びたこともあるかもしれませんけれども、近ごろの若者はだめだという事では40年前、私はそのチャンピオンであったわけですから、だめな見本だったわけです。まずその中で今振り返って何が一番だめだったかと思えますと、何もしなかった。何も考えなかったというところが一番だめなことだった、私自身を振り返ってそう思います。何もしないで夜、フトンに入ったら無意味に過ごした一日を嘆くわけですよ。これが1年間続いて、さらにまた1年が過ぎていくという具合だった訳です。だから7年も8年も大学に行っていたわけですが。何もしないで変化が起こるはずもないし、何もしないで変化を求めるのはそれは虫のいい話で、たまたま私はどうやって少しやる気を出したか言いますと、卒業するときには4月、3月ですか、実は子供には言っていない話ですけど、どういうことがあったかと言いますと、私はできちゃった婚だったわけですよ。そしたらまず無職で父親になりたくないと言っていた。無職で人の親父に

絶対になりたくないということで、どこでもいいから就職したいと思って、頑張らざるを得なかったんですね。それにしてもなかなか自分がみずから考えて、みずからを変えるというのは難しいと思います。そこで少し物の考え方といいますかね、私は就職をして、ある意味じゃ頑張ったんですよ。そのときに考えたことは自分ならどうするかという、自分ならばこの問題をどう対処するのだろうかという考えを持った事がよかったと思います。

それともう一つ、見る方向を変えるわけです。方向を変えて物を見れば結構おもしろい。例えば原子爆弾ですが、あの原子爆弾を一方から見ればたった1発であれだけの殺傷力があるわけですから、これは軍事的に持つべきだという見方もできると思うんですね。もう一方は今、あちこちで反対運動が起きているように、あれだけ悲惨な武器であるならばこれは人類から抹消すべきだと。見方によってはほんとに180度変わった見方ができる。もう一つ例を挙げますと、アフリカに靴のセールスマンが二人行った。このときに一人は何千年も裸足で過ごしているところだから、「靴は売れません」と報告した。もう一人は「みんなが裸足である、みんな裸足だから靴の販売はこれはもう無尽蔵にやれます」という、こういう具合に見方によっては180度の判断ができるわけでありまして。そこで、ひとつ私の体験した実例といいますか、これは、皆さん考えてだめなら何か物を見る。私がこの前、一昨年ですが、モンゴルに行って、大変感動してびっくりしました。それは皆さんお名前知っている方も多いと思うんですが、池間哲朗さんというアジアチャイルドサポートの代表者の彼と一緒にモンゴルを行ってきました。モンゴルの子供たちというのは、これはもう我々の想像を絶する生活をしている。また我々の想像を絶する体験をした子供たちがたくさんいました。1週間彼らと一緒に過ごしたわけですがけれども、どういう子供がいたかといいますと、沖縄から20名ぐらいの団体で行ったんですけれども、子供たちと寝食を共に1週間ぐらいやったわけです。我々が行った町はダルハンという町でした。朝青龍のウランバートルから200kmぐらい離れた場所で、その町の失業率が40%と言う高い失業率のまちでありました。40%の失業率といったら親父は仕事がないわけですよ。女房・子供を養わなきゃならん親父に仕事がないわけですから、これは想像しても向こうのお父さんたちの立場になればむなしに決まっていますよ。どうなったかといいますと、酒におぼれてアル中になって

しまった。そこでこのお母さんがお父さんをはずみで殺してしまった。その場面を見た兄弟が我々が行った施設にいました。マンホールは冬は非常に温かいんですよ、中に入ったことないが。マンホールチルドレンという言葉があるぐらいですから。しかも大変貧しいですから、お母さんと一緒にマンホールにいた女の子のお母さんが飢え死にしてしまった。そこでモンゴルの警察の検死というんですかね、この子供を立ち合わせたときには、既にこのお母さんは半腐乱状態であったとかですね。こういう経験をした子供たちがたくさんいるところに我々行ったわけですね。そしたらこの子供たちの中には何年か前に沖縄に来たことがあるという子もたくさんいました。そこで対面式をやったんですが、対面式のときに我々は沖縄からお土産を持って行って、目録をその子供の代表に渡してそのセレモニーは終わる予定でしたけど、次々に子供たちが出てきて、みずから我々にあいさつするんですよ。その中でどういうあいさつがあったかといいますと、一人はまだ小学生ぐらい小さい子でしたけど、お父さん、お母さんも既に亡くなって、この子が何年か前に沖縄に来たときに池間さんの家にホームステイをしたそうです。この子が出てきてあいさつをしたんですけれども、私は沖縄のお父さん、池間さんとあのときに約束をしました。どんなに淋しくても悲しくてももう泣かないという約束をしたから、私はあの日以来泣いていませんと涙を流しながら泣きじゃくりながらあいさつをしているんですよ。それから一人の子が、そこはたくさん子供たちいるものですから全員が沖縄に来られるわけじゃないんですね。沖縄に来られなかった友人を代表してあいさつをしますということでしたが、どういうあいさつをしたかという、「私達も沖縄に行きたい。沖縄のすばらしいことは友達から聞いてよく知っています。青い海、青い空とか。しかし、そういうのが見たいからじゃなくて沖縄のお父さん、お母さんの愛情に触れて手をつないで歩きたい。だから沖縄に行きたいんです」。そういう非常に真に迫ったあいさつをしていました。我々沖縄から行ったメンバーはどんなことをしたかといいますと、言葉も通じないし、黙って抱きしめるしかないですね。このお父さんを殺したそのお母さんの子供兄弟2人がいましたけれどもね、帽子を深々とかぶって我々と目を合わさないようにしているんです。沖縄から行った我々はみんなこの子を抱きしめ、帽子をこう上に上げて、「頑張れよ」としか言いようがないわけです。これを約1週間、みんなやったわけです。そしたら帰りの飛

行場ではこの子らみんなが「帰らないでくれ」と言って、泣くんですよ。大変凄まじい経験をした愛情に飢えている子供たちを見てきました。皆さんも、今の若いときにああいう凄まじい現場というんですかね、ああいうものを見れば自分の甘さというのも一つの参考になるのではないかという気がいたしました。モンゴルなんていうのは10万円ぐらいで行けますからね。今からためても来年には十分間に合うと思います。こういうふうにして、当然のことながら私が何遍もしゃべるよりも、一回見れば、その方が理解できるに決まっていますよ。「百聞は一見にしかず」ですからね。私の尊敬する人が言っている、亡くなったんですけど、この人から私は色紙をいただきました。何て書いてあったかといいますと、「百聞は一見にしかず」ここまではみんなわかりますよね、それから「百見は一考にしかず」と。100回見る、一考というのは考える、100回見ても一つの考えには及ばないと。その次に、「百考は一行にしかず」。100回考えても、一行、行う。こういう色紙をいただきました。今でも私は自分の手帳に挟んで、非常にいい言葉だなと思っております。いずれにしても皆さん何を見るのか、そしてどう考えるか、どう行うのかという、こういう態度が大切だと思います。

もう一つ私が体験したというかおかしいと思ったことがあるんですよ。それは物事を素直に見るということですね、この中には首里高出身の方もいらっしゃると思うんですけども、首里高は昔、約200年ぐらい前に尚温王という人がつくった国学という学校が始まりなんですね。その首里高の図書館に、昔は図書館にあったんですが、「海邦養秀」という扁額がありまして、その扁額の解説を書かれたのが、東恩納寛惇先生。皆さん方が御存じかどうか、東恩納寛惇先生といたら沖縄学の大家でありまして、伊波普猷賞、東恩納寛惇賞というのがあるぐらい大変な大学者なんですよ。この東恩納先生がこの海邦養秀について解説をしておられる。何て書いておられるかといいますと、御存じの守礼の邦という邦ですね、海邦養秀という字は海の邦の、養は養う、秀才の人を。こういう字なんですよ。そこで東恩納先生が、海邦という字は「守礼の邦」の邦、それから「海表恭藩」という扁額があるんですがね、この海表恭藩の「海」と守礼の邦の「邦」をくっつけて尚温が海邦という字をつくったんだと解説しておられるんです。ところが、これは物理的にあり得ない。なぜかといいますと、尚温が学校を造ったのは、1798年、1800年の少し前で

す。一方「守礼の邦」という扁額は1500年代に沖縄に来ている。だから当然、尚温はこの守礼の邦という扁額は見ている訳ですが、「海表恭藩」というこの扁額は1800年以降に琉球には渡っている。尚温はこの海表恭藩という額は物理的に見れないんですよ、時代が合わないのです。私はこういうのを知りすぎた失敗、素直に物を見ないがための失敗だったと思うんですよ。東恩納先生は尚温という王がどんな王様だったということもちゃんと解説している。どのぐらいすごいことだったかといいますと、尚温以前は沖縄から中国への留学生が4名行ったんですね。この4名とも中国からの帰化人といいますか、久米村の、久米出身の子孫達が中国に留学していた。それを久米村から2人、それから地元といいますか、沖縄人を2人という制度に切り替えた。高級官僚たちの猛反対を押し切ってそういうことを実現させたのが尚温だと。それから国学という学校までつくって、いわゆる人材育成に努めた。そういう若い王が、何でよその額の字をものまねするか、この王様はどういうことを考えたんだろうという素直な目であの額は解釈すべきだろうと思います。ここに首里高の方がいらっしゃったら、ぜひ参考にさせていただきたいと思います。

こういうふうにして、あまりに知りすぎている上での失敗というのは往々にしてあることなんです。それはやはり物事を、特に若い皆さん、素直に物を見る訓練、それから逆の立場を変えてみる訓練、これも必要だと思います。

もう一つ、当を得て妙といいますか面白い話があります。船が沈んで、いかだに乗り移った多国籍人というか、そのいかだの中にアメリカ人とかドイツ人、フランス人とか日本人がいたそうです。ところがだんだんいかだが水を吸ってその人数を支えきれなくなりました。だれか飛び込まなくっちゃこのいかだは浮かばないわけです。そしたらアメリカ人には何て言ったらいいかといったら、アメリカ人には「今、君、飛び込んだらヒーローだよ」と言ったらアメリカ人は飛び込む。ドイツ人は、理路整然と説明してだれか飛び込まないとだめだからと、ドイツ人は理路整然と説明したら飛び込む。最後に日本人は何と言ったら飛び込ませることができるかといったら、「みんな飛び込んでいますよ」と言ったら飛び込む。こういうふう書いてあったんですよ。

学生時代の悲しい話を一つやりますと、当然、皆さんみたいに私にも青春時代があったわけですね。青春時代というのは恋焦がれ、異性に興味があるわけですね

れども、私もそういう興味を持ったんです。そこで、あのころは携帯なんてないですから、手紙で、お付き合い願いたいという手紙を出した。返事が来たんですよ。そしたら漢字がめちゃくちゃに多くて読めない字をたくさん載せてある、それでも内容はわかったんですよ。お断りしたいということだったんですけどね。ものすごくショックでしたが、そのときに私がほんとに慰められたのは、森鷗外の『安井婦人』という本でした。皆さんの中で私と同じように失意の経験をされている学生さんがいるなら、森鷗外の5、6ページの非常に短い短編がありますので、ぜひ読んでいただきたいと思います。

こうして取りとめのない話をしているわけですがけれども、先ほど所長の紹介の中で国学院という大学を7年かかって出たわけですがけれども、決して学問が好きで7年もいたわけじゃなくて、出席日数とか、意地の悪い教授がいてとか点数が取れなかったとか。いずれにしても国学院にいました。そこで私、アルバイトをやったんですよ。当然、皆さんもアルバイトという経験は随分なさった方はいるかもしれませんが、あの当時一番稼げたのが、今でもありますが、東京の築地に魚市場があって、そこで夜の12時から朝の8時まで働くわけですよ。そういうバイトをやったり、それからヤクルトという、今はヤクルトはおばさんたちが配達していますが、私が今でも感謝しているという非常にいい気持ちになったのは、今はプラスチックみたいなものに入っていますが、昔は瓶だったんですよ。瓶に入ったヤクルトを配達してました。学生とはいいながら集金までやらされたんですよ。東京都の大田区に荏原とか馬込とかいう結構な高級住宅街があります。そこを配達しているときに、勝手口のあるお屋敷がありましてね、勝手口の押しボタンを押して、「ヤクルトの集金に来ました」と言ったら、非常に上品なおばあさんが出てこられて「あなたは学生さんですか」と聞かれた。「そうです」と言ったら、「将来の日本を背負う学生のあなたが、何でこんなところから入ってきているんですか、玄関に回りなさい」と言われて、非常に気持ちよく思ったことがあります。ああいう配達ものというのは常に、いつも同じ時間に配達するわけですよ。あのあたりは結構坂がありまして坂は自転車に乗れないから押すわけですよ。すると瓶ですからね、ガチャガチャと音がするわけですよ。私の音がしたら小さい子が毎日出てきて自転車を押してくれた。きょうはなぜこんなふうな話をしているかということ、女子学生もたくさんいらっしゃる

ので、こういうおばあちゃんを目指していただきたいと思うからであります。人の全く関係のない青年に気持ちよく、ある種の希望を与えてくれました。もう長年大学にいと、親父もあきれて金を送らなくなって、自分で生きていけなくちゃいけないので、アルバイトなんかやった訳です。その青春時代に瞬間的ではありましたが、大変優しい子供だったり、おばあちゃんに会ったりしたことを今でも覚えている。若いあなた方、学生の皆さんもこういうのを目指していただければ大変ありがたいなと思うわけでありませう。

いずれにしても、今どきの若い者はと言われたこのチャンピオンの私が、あなた方に話をして参考になるのかどうかというのは疑問ですが、いずれにしても間違いない事実というのは、舞台が回るといいますか、人生は回り舞台である。20年前の私達は、歴史の中心にいて、我々が沖縄の観光界を動かしていた。しかし、それから20年たった今は舞台はこう回って、既に端っこの方でもう舞台を降りようかという袖に我々はいるわけだ。あなた方は今、間違いなく回り舞台の一番端っこあたりに登場している。この舞台から引っ込もうとしている我々があなた方に期待をしようがしまいが、間違いなくあなた方がその歴史の中心に躍り出る。どうかそういう日のために、さっき言った私の話が少しでも参考になればと思います。

私も講演・講義というのは随分昔から聞いたわけですがけれども、一番すばらしい教授だなどと思ったのは、授業のベルが鳴ってもなかなか教室に入ってこなくて、授業の終わるベルよりも早く講演を終わらせる、すばらしい先生だなど。

ということであと20分あると思いますけれども、これで終わるわけじゃなくて、何か御質問があれば、そういうものをお聞きしたいと思ひます。それでは一応私の講演を終わります。どうも御清聴ありがとうございました。

(拍手)

○司会 (大山)

ありがとうございました。私がちょっと聞きたいんですけども、南都ワールドは今でも例えば30歳過ぎても、いい人材であれば採用するという方針があるんですか。

○花崎

今の年齢制限というのはおそらく我々の会社だけでなく、みんな人材が欲しい

んですよ。そういうことで、先ほど申し上げた、もしあなた方が3カ国語を完全にマスターして、30歳過ぎて入ってきて、それはもう観光界には絶対に欲しい人材になっています。特にあなた方の大学の教育を受けた教養を持ったガイドとして、そういういろいろ企画・文化を述べられる人間は今の沖縄の観光業界にはずばり申し上げて一人もいない。あなた方が仮にこれから10年経って、30歳を過ぎて入って来られても沖縄観光業界は絶対にあなた方を必要としている。これははっきり言えます。

○司会（大山）

ありがとうございました。

今の若者という言葉があれば、昔の若者という言葉もあると思いますけれども、経営者としてその辺の違い、あるいはどういうふうに感じていらっしゃるのか。

○花崎

ずばり申し上げると、少し変わってきたのではないかなという気がいたします。非常に厳しい表現をするならば、ちょっと一昔前と云ったら何だけど、例えば先ほど私の例で申し上げた就業規則をつくりなさいというときに、私がまず質問したことは「いつまでにつくればいいですか」ということを聞きました。今の若者というか、自分のことを棚に上げてでの悪い学生だったわけですが、いわゆる企業の先輩の目から見たら、どういう若者層がふえているかと言ったら、厳しい言葉で言ったら、指示待ちの人が目立つ。ですから皆さんにさんざん申し上げているのは、自分ならどうするかというこの考えはいつまでも必ず通用する。今でも通用するし、あなた方が社会に出ても必ず通用します。はっきり申し上げて自分ならどうするかというこの考えを持った若者が非常に少ないということが経営者として気になるところです。今からあなた方、まだ2年、3年ですか、学校があつて、こういう物の考え方を訓練すれば必ずできる。その公務員にはならないで、公務員になったら物を考えなくてもいい。いずれにしてもそういう違いというものを若干感じます。頑張ってください。

私が20代前半を無意味に過ごした原因は何だったのかと、まず第一に言えることは物を考えなかったということが言えると思うんですが、何でしょうね。やはり物を考える訓練が全くなかったからだと思います。

○学生

よろしく申し上げます。花崎先生は経営者として成功しているじゃないですか。自分は将来、何か自分で何かしら経営をしたいなということを頭の片隅に置いてるんですけど、ずばり経営者として成功するためには、この20代というのをどういうふうな考えと気持ちを持ってやっていけば自ずと道は開かれていくのかなと、こういう経験からしたもの、例えば人付き合いをしっかりととか、そういうのをちょっと聞かせていただきたいなという気持ちがあります。よろしく申し上げます。

○花崎

事業を始めるにあたって必要な事は利益追求を第一にかかげるのではなく、何の為に事業を興すかといった理念が最初にあるべきでしょうね。

具体的にどういう企業を興されるのか、ちょっとわかりませんがとも社員の若者をたくさん見てきた中で、この青年は伸びるなというのには幾つか要素があった。それは絶対的に明るいということです。明るい青年の周りにはいろんな友達ができる。やはり一人ではもろもろできませんので、明るい青年のところには人が寄ってくる。若い人たちを見ていて、絶対に明るいこと、これははっきり言える。もう一つは、例えば私どもの会社は小さい会社ですので、その情報をどう共有するかというのも非常に大事なことになってくると思います。例えば、9.11アメリカの同時多発テロがありました。あの直後、会社の鳴る電話は全部キャンセルの電話。修学旅行はキャンセル、キャンセルというキャンセルの電話ばかりでした。このままいったら、うちの会社は潰れる、こうして全社員集まってもらって正直に状況を説明して、今のままでいったら会社は潰れる。どうしても君たちのあなた方の知恵をかりたいというこちらからの情報を流した。そのときにほんとにいろんな情報が出てきた。例えば、うちは酒を売っていますので、この酒を1本売ればお客さんが1人来たことになります。全社員でこれを1万本売りましょと、こういう社員が出てきたり、こういう危険な大変なときだからキャッチコピーというか、キャッチフレーズをつくりましょというときに、非常に若い女の子でしたけど、一期一会という字がありますよね、「会う」というところだけど、この子は一期一笑というのは「微笑む」という字を掲げてくれた。これを会社のあちこちにべたべた張ってね、今だからこそ笑いながら頑張ろうという…。そういうぐあいに、あなたはこれから

いろんなことを起そうとしているわけだけど、明るいということは絶対必要だし、仲間との情報共有というものも、ほんとの情報共有していくということは大事なことでと思います。期待しています、頑張ってください。

○司会（大山）

どうも花崎さん面白い話ありがとうございました。参加してくれた学生の皆さん、市民のみなさん、御参加ありがとうございました。

これにて沖縄国際大学の第13回法政研究所の講演会をおしまいにしたいと思います。